

(^_^)v 趣味に生きる (第34回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

城を訪ねる

中島 康仁

(松下記念病院 中央臨床検査部)

◆はじめに

私は城が好きで、昨年、公益社団法人日本臨床検査同学院機関誌「通信」に、「マニアが語るトレビア 城を訪ねる」と題して4回にわたりエッセイを書かせていただきました。これに味を占めて、皆様の迷惑も顧みずに、今回、「趣味に生きる」コーナーに登場させていただくこととなりました。内容は「通信」と重複するところがありますが、充実させるべくまとめましたので何卒、宜しくお付き合い下さい。

私は旅が好きで、行き先を考える時は道中や目的地に城があり、お蕎麦を食べられ、宿には温泉があるということが条件になります。そして訪ねた城はデジカメに撮ることでその城を攻め落とした、と自分勝手に定義しています。では私が攻め落とした城を題材にして城探訪紀をつれづれなるままにまとめさせていただきます。

◆城の始まりは？

皆さんは城といえば天守や櫓などの建築物を思い浮かべませんか。でもそのような建物が建てられるようになってきたのは戦国時代の後期とされています。城という字は土偏に成ると書き、元来は土を盛った防御施設を指すようです。城の始まりは弥生時代までさかのぼるといわれ、その時代になると人は定住生活が始まり、外敵の侵入に対する防御が必要となってきました。そのために集落単位で柵や堀を設けたのが城の始まりといわれています。この代表的なものが佐賀県の吉野ヶ里遺跡で知られる環濠集落(集落の周りに堀をほり、柵や土塁を築き、要所に櫓を建てるなどの防御設備をつくって敵の攻撃に備えた集落)です。吉野ヶ里遺跡(写真1)は魏志倭人伝に出てくる「邪馬台国」を彷彿とさせる日本の古代の歴史を解き明かす特別史跡では



写真1 吉野ヶ里遺跡

ありますが、城の始まりと考えると、また違った面白さがあり、日本城郭協会が選定した「日本100名城」の一つに選ばれる所以だと思います。

◆山城の出現

中世になると戦が平常化してきて、武士は山麓の平地に居館を、背後の山に山城を築き、戦闘になると山城に立て籠もるといった様式が一般化してきます。

インターネットで三大山城をキーワードにして検索をかけると、岩村城(岐阜県恵那市岩村町)、高取城(奈良県高取町)、備中松山城(岡山県高梁市)がヒットします。

岩村城は“日本一”標高が高いところにある山城、備中松山城は天守閣が現存する唯一の山城、高取城は山頂と麓の高低差が最も高い城、と紹介されています。その中で私の好きな岩村城と備中松山城、そして日本五大山城に取り上げられる小谷城についてのエピソードと私が訪れた時の感想を紹介させていただきます。

1. 岩村城～戦国の荒波を受けた悲哀の山城～

岩村城付近は霧が多く発生するため、別名・霧ヶ城とも呼ばれています。近くに行くと「女城主の城」という案内を見ることができます。これは戦国時代の城主であった遠山景任は、織田信長との関係を重視し、信長の叔母にあた

る「おつやの方」を妻に、信長の息子「坊丸(後の織田勝長)」を養子として縁戚関係を結びました。ところが遠山景任が亡くなると、武田信玄は家来の秋山信友に岩村城を攻めさせました。この時、坊丸は3歳だったため、実際の城主は景任の妻のおつやの方が務めました。その夫人が甲冑に身を固めて城の防戦を指揮し、秋山信友はなかなか城を降伏させることが出来ませんでした。結局、秋山信友はおつやの方を妻とし、坊丸が跡継ぎになるという条件で降伏させました。ところがこれに怒ったのが織田信長で、武田氏の勢力が弱体化すると信長は岩村城を奪い返し、開城の際に信友夫妻の助命を約束していたにもかかわらず、皆殺しにして長良川河川敷で逆さ磔の刑に処したという悲哀の物語が残っています。

岩村城へ車で行くには岩村歴史資料館にある駐車場もしくは山頂の本丸下の出丸の駐車場を利用すると便利です。資料館から本丸までは30分ぐらいで登ることが出来ますが、これが結構、勾配があり足にこたえます。城跡には天守閣などの建物は残っていませんが、霧ヶ城といわれる由縁となった井戸や山城ならではの巧みに積み上げられた石垣(写真2)は良く残っています。本丸からはあたかもお殿様になった気分です。いにしえの城下町を想像することが出来ますので

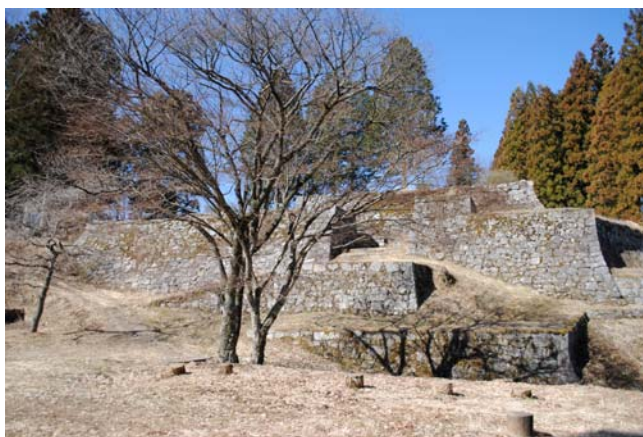


写真2 岩村城石垣

城見学だけでなく観光にもお勧めします。

2. 備中松山城～大石内蔵助ゆかりの山城～

備中松山城は三大山城の中で山頂の城跡に建物が残っている唯一の城です。城内には天守、二重櫓、土堀の一部が現存(写真3)しており、昭和25年には重要文化財の指定を受けています。

江戸時代が終わると明治政府は、近代国家づくりを目指して、幕藩体制の象徴ともいえる城を廃城令で、ことごとく取り壊しました。ただこの城の幸運なところは、標高430メートルの小高い山の頂に建っているため、取り壊すのも大変なので、そのまま放置されたおかげで(?)現在まで残ることができました。

この城はちょっと変わった形で歴史の表舞台に登場します。元禄6年(1693年)に城主だった水谷勝美には跡継ぎがなく、死後、幕府から取り潰しの命令がでます。それに反抗した家臣の一部が、城に立て籠もり、あわや徹底抗戦かと思われたときに、「忠臣蔵」の主人公である大石内蔵助が説得にあたりました。うまく話をまとめた大石内蔵助ですが、数年後に自身も赤穂城を明け渡す立場になり、「忠臣蔵」のドラマの幕開けとなります。まさしく備中松山城は大石内蔵助により戦いという災難を逃れて現在にその雄姿を残し、大石内蔵助は主君への忠臣として

自らの名を残したことに、運命の悪戯を感じずにはられません。

さて備中松山城へは、ふいご峠までシャトルバスで、そこから天守までは厳しい上り坂の山道と石段を徒歩で20分程歩くこととなります。しかし到着して下から天守を眺めると、その勇士に疲れも忘れてしまいます。天守は現存する12ヵ所の中では最も小さいものになりますが、改修された白亜の2層2階の天守閣は華麗な姿を私たちに見せてくれます(写真3)。

少しだけ残念なのは、野生の猿が侵入してくるのを防ぐために建造物の周囲に高压電線の柵が張り巡らせてあることです。これも山という自然の中で人が造った城がその雄姿を後世に正確に伝えるためには必要なのかもしれませんが、人と野生動物が共生するには、もう少し別の方法がないものか、と感じました。

3. 小谷城～浅井長政とお市の方との悲劇の舞台～

小谷城(おだにじょう)は、滋賀県長浜市湖北町伊部にあった戦国時代の山城で、城跡は国の史跡に指定されています。2011年のNHK大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』でも取り上げられ、浅井長政とお市の方との悲劇の舞台として語られています。



写真3 備中松山城

私は滋賀県で行われた近畿の臨床化学研修会が日曜日の昼で終了したので、足をのぼして研修会に参加した服装・装備のまま小谷城へ行ってみることにしました。これが間違いの始まりでした。小谷山の登山口の駐車場に車を停めて、そこから30分ほど歩くと本丸跡まで辿り着くことができます。背広は車の中に置き、デジタルカメラとお茶だけを持って昇ったのですが、革靴で昇るのは間違いでした。足は痛くなり、たかが30分、されど30分の山登りとなってしまいました。

城の中核部への登り口が黒金門跡で、建物は何もありませんが、左右に大きな石垣が残っています。黒金門を超えて右におれた細い山道を歩くと小谷城一の聖域とされる赤尾屋敷という曲輪に着きます。ここには「浅井長政公自刃之地」と刻まれた石碑が建っています。木が上から覆いかぶさっていて、昼でも薄暗く、非常に不気味です。実は写真を撮ろうと思ったのですが、あまりに薄暗くて綺麗な写真が撮れなかった(撮らせない?)ので、赤尾屋敷跡の石碑でお許し下さい(写真4)。

足を伸ばせばさらに奥の大嶽にまで行けるのですが、装備を間違えたこと、城の登山口に着いたのが昼を過ぎていたので、翌日の仕事のことも考えて、退散してしまいました。

建物は何一つ残っていませんが、今なお戦国の悲劇を感じられるお勧めの城です。小谷城は織田信長に攻められ落城しますが、浅井氏の一部は羽柴秀吉に与えられました。秀吉は琵琶湖から離れた小谷城を嫌い、北国街道と琵琶湖に面している今浜に新たに長浜城を築城しました。時代が変わりつつあったのかもしれませんが、巨大な小谷城を捨て、長浜城を築城した豊臣秀吉の先見の明には感心させられます。のように小谷城は廃城となってしまうのですが、築かれていた二層の天守は長浜城に、そして彦根城の西の丸三重櫓として移築されたと伝承されています。彦根城に行かれる際は西の丸三重櫓も見ていただき、在りし日の小谷城を想像していただくのも楽しいのではないかと思います。

4. 山ジローズへの誘い～山城の魅力を感じてもらうために～

最近「山ガール」と称して素敵なアウトドアファッションに身を包んで山に登る女性や、「歴女」と称する歴史好きな女性が話題になっています。そこで私は山ガールや歴女の皆さんと語り合いながら山城散策をする「山ジローズ」(筆者の造語です)をご提案させていただきます。退屈な私の城談話を読むよりも、歴史好きの女性(男性)とアウトドアファッションでの登山とまではいかなくても、山城へ散策に出て



写真4 赤尾屋敷跡

は如何でしょうか。ストレス発散・解消になりますし、日ごろ、運動不足の方にはメタボリック解消に役立ちます。頂上の石垣跡でおにぎりでも頬張れば、そのお味は別格なものになります。また散策のお相手が奥様やご主人であれば、日頃会話がなくても、この時ばかりは会話も弾むものと思います。是非、「山ジローズ」にトライしてみてください。

◆山城から平山城・平城へ

時代が進んでくると、戦への備えとして山城に居住しては、常時麓を往復することになり、不便を生じてきます。しかし敵の攻撃から城を守らなければなりません。鎌倉・室町時代の城は土を高く盛り上げた土塁で城をかためていたようです。土塁は土砂を積み上げたもので雨水などに弱く、戦乱が激しくなり土塁の強化のため表面に石を張り付ける張石(はりいし)や、石を粘土で接着し積み上げていく練積(ねりづみ)などが行われました。しかし練積では内部に水がたまり壊れやすい欠点があり、普及はしなかったようです。次に粘土を使わずに石だけで積み上げていく空積(からづみ)が出現し、これが城郭の石垣に発展していきます。つまり石で高い城壁を築いて石垣とし、深い溝を掘って堀として敵の攻撃から城を守りました。

そこで戦国大名は険阻な山岳地から平地の目立つ場所に城を建て、山肌を利用した土塁は石

垣に、堀も自然の川から人工的なものにして、支配の象徴として威容を見せつけることで領地の支配を固め、近世の城郭として発展してきました。

1. 石不足を補うために～墓石をも使った石垣の意味～

このようにして戦国大名は城を建てるに際して多くの石が必要となり、墓石や民家の礎石さらに石仏までを取り上げました。時には敵の武将の墓石を使用することで己の権力を誇示したとも言われています。そして取り上げた石を正面中央部や角の部分など、人目につく部分に使うようになりました。これは城には物理的な強さだけでなく、多くの人の力を結集したという呪術的な強さをも必要と考えられており、領民の間から集めた石を石垣に転用(転用石)したとされています。また墓石や石仏には、人々の先祖代々の思念や信仰の力が籠もっているため、石垣の素材としては最適という考えがあります。そこで様々な石を良く見える場所に配置することで、領主・領民が一体となったことを誇示することだけでなく、石を提供した領民へのサービスにもなったという見方もあります。

福知山城、大和郡山城では特に多くの転用石が使われ、福知山城では見える場所だけでも450個から500個が確認されているほか、その一部が城内に展示されています(写真5)。いまなお何某かの文字や家紋等が書かれているのが



写真5 福知山城の転用石展示

わかります。城に行かれたら、ゆっくり歩いて石垣の石を観察されるのもお勧めします。

2. 丸岡城～最も古い天守閣の下に眠るものは？～

丸岡城は福井県坂井市丸岡町にある城で、別名、霞ヶ城ともいわれています。この城は、織田信長が天正4年(1576年)に柴田勝家の甥である勝豊に築かせました。標高約17mの陵上に立地する平山城で、現存する天守としては最古級といわれています。天守閣は高さが約6.2mの石垣の天主台のうえに二重三階望楼型独立式と呼ばれる形式で建ち、その屋根瓦は全国的にも珍しい石製の瓦が使用されています

3. 「人柱お静」の伝説

丸岡城を築城する際に、天守台の石垣が何度も崩れて工事が進行しなかったため、人柱を立てることになりました。城下に住む貧しい片目の未亡人「お静」は、息子が武士に取り立てられることを条件に人柱となることを申し出ました。その願いは受け入れられ、お静は人柱となって土中に埋められ、天守の工事は無事完了しました。しかし柴田勝豊はほどなく所領を別の場所に移す国替となり、その約束は果たされませんでした。それを怨んだお静の怨霊は大蛇となって暴れたということです。毎年4月の堀の藻を刈る頃に丸岡城は大雨に見舞われ、人々は

それをお静の涙雨と呼ぶそうです。

4. 竹田城～天空の城 足腰弱る石垣～

皆さんは2013年6月26日付の朝日新聞に「天空の城 足腰弱る」という記事が掲載されていたのをご存じでしょうか。「天空の城」とは兵庫県朝来市和田山町にある竹田城址のことで、雲海に浮かぶ城址が見られることで有名です。ところが最近では観光客が増加して地面が踏み固められて下草が生えず、雨水が石垣のすき間に流れ込むようになり、石垣が崩落の危険性がでてきたため、天守台の石垣を立ち入り禁止としたということです。

竹田城は石垣だけが残る城ですが、城下からは遥か高く見上げる山の頂に位置し虎が臥せているように見えることから「虎臥城(とらふすじょう・こがじょう)」とも呼ばれています(写真6)。この城は、しばしば円山川の川霧により石垣群が雲海に浮かび上がった城跡を眺めることができるため、城好きに限らずに、とても人気のある城跡です。

これから天空の城といわれるようになり「日本のマチュピチュ」とも呼ばれています。という私も、まだ天空となった竹田城を見たことはありませんが、是非、見て写真に収めたいと思っています。

ウィキペディアで「人柱」について調べると、

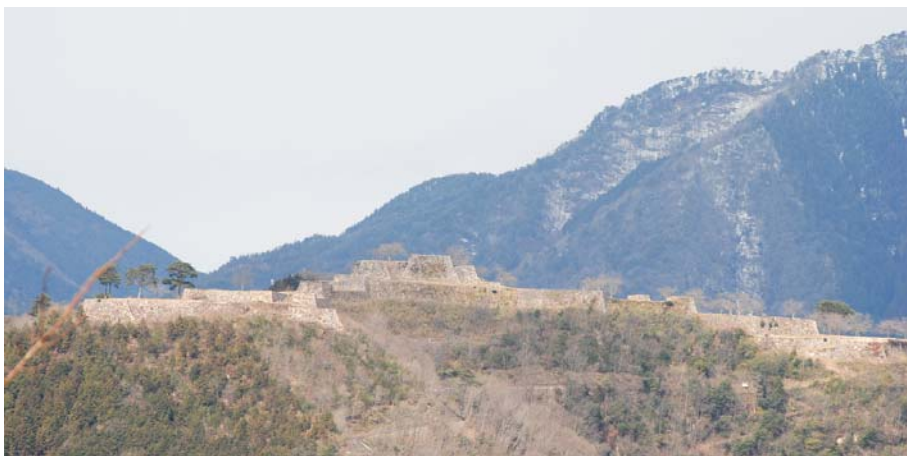


写真6 立雲峡からみた雲海に浮かんでいない？ 竹田城址

人柱の伝説は日本各地に残されていますが、特に築城の際には、人柱が埋められたという伝説が伝わる城は多いようです。またこの場合の「柱」は、死者の靈魂を「人でありながら神に近い存在」と考え、魂の入れられた建造物は、そうでない建造物に比べより強固に、例えるなら自然の地形のように長くその機能を果たすはずであると考えられていた、と記載されています。人柱伝説の真偽のほどは別として、十分な技術や道具のない時代に堅固な城を構築し維持していくためには、困難さゆえに神に委ねなければならぬほどの人柱伝説が生まれてきたのではないかと思います。そしてその石垣や建造物が月日を経ると、自然と調和して、新たな美を創出したり、芸術を生みだしたりするものだと思います。竹田城址の天守台の石垣が立ち入り禁止となったことは残念なことではありますが、その美しい石垣を後世に残していくということは私たちの責任ではないでしょうか。

◆天 守

1. ～黒い天守と白い天守～

さて城といえば、やっぱり天守がシンボルですよ。今でも昔のままの天守が残っているものは12城で、北から弘前城、松本城、丸岡城、犬山城、彦根城、姫路城、松江城、備中松山城、丸亀城、松山城、宇和島城、高知城です。

皆さんは天守といったら何を想像しますか、私はつい最近までお殿様の居住空間だと思っていました。ところが天守に住んだお殿様は織田信長ぐらいだそうです。現存する天守に登られた方はお気づきだと思いますが、階段が急で、とっても生活できるようなものではありませんよ。これは戦時に敵が天守の中まで攻めてきた場合に登りにくくするためです。また天守にトイレを造ると縁起が悪いとされていたためトイレもなかったようです。

それでは天守の役割とは何なのでしょう。戦国時代に物見櫓が発展してできたもので見張り台としての役割や、戦時の最高司令部としての役割もありました。「櫓」とはもともと「矢

倉」と書き、武器庫のことを表していました。それが次第に単なる武器庫ではなく、防御設備を備えた建物へと進化し、城の権威を表す建物、つまり城の象徴的な建物になりました。ところが大坂の陣が終わって戦がなくなると、見張り台・司令部的役割は不要になり、天守は城の権威を見せ付ける役割だけの飾り物になりました。江戸時代にはおもに物置として利用されることが多くなり、名古屋城大天守ではほとんど利用されることがなく空き家のような建物となったそうです。また江戸城は江戸幕府の中樞だったので1657年明暦の大火により天守を含めた江戸城の多くを焼失しました。幕府は町の復興を優先し、経済的な理由からも天守は再建しなかったようです。

それでは皆さんはなぜ天守に黒い色と白い色のものがあるのかをご存じでしょうか？天守の色を飾ることになるのは壁ですが、その表面の仕上げ方法には下見板張(したみいたばり)と塗籠(ぬりごめ)という方法が主に使われています。下見板張は土壁の外側に板を張ったもので、その板にはすすと柿渋を混ぜた墨を塗るため黒くなります。塗籠は土壁の表面を白漆喰で仕上げるため白くなります。初めは下見板張、続いて塗籠が登場し、『古い城は黒く、新しい城は白い』とか『黒は豊臣系に多く、白は徳川系に多い』といわれています。

よく人から「中島さんが好きな天守はどれですか？」と聞かれることがあります。そんな時、私は「三松(さんまつ：私の造語)」と答えます。

“三松？”つまり松山城(写真7)、松江城(写真8)、松本城(写真9)、です。“三松”に共通するのは天守の壁が漆黒で飾り気がないところです。私には威風堂々とした武士らしい印象を受けるといえるのが、その理由です。

2. 大洲城～13番目の天守～

明治政府は、多くの城の建物を破壊したり競売にかけて二束三文で売りにだしました。ひどいものになると解体され、風呂を沸かす薪となったものもあるそうです。あの有名な松本城でさえも天守が競売に出されましたが、地元の有



写真7 松山城天守



写真8 松江城天守



写真9 松本城天守

力者によって買い戻されたという逸話が残っています。

四国・愛媛県大洲市大洲にある大洲城も例外ではなく、維新後に城内のほとんどの建築物は破却され、天守は明治21年に老朽化と構造上の欠陥のために解体されました。

ところがこの城は明治時代に撮影された外観写真のほか、大洲藩作事棟梁の中村家に伝わる天守雛形(木組み模型)など内部構造に関する資料が充実していたため、大洲市市制施行50周年記念事業として平成16年(2004年)に当時の工法・木造で復元しました。また天守の高さは石垣の上から19.15mあり、本来なら建築基準法で木造では認められない規模であったため、当時の建設省や愛媛県は建設計画をなかなか認めなかったようですが、大洲市により2年近い折衝を経て、保存建築物として建築基準法の適用除外が認められ、往年の複合連結式による天守群の復元に至りました(写真10)。

大洲城に多くの資料が残っていることは奇跡でしたが、復元資金に民間からの多くの寄付が集められたことは、松本城を地元の有力者によって買い戻されたのと同じく、地元の伝統や文化を愛して、後生に引き継ぎ成長させなければならないという地域の人々の愛情の結集ではないのでしょうか。いつの日にか大洲城天守が13番目の天守として承認されることを願っています。



写真10 大洲城天守

◆最後に

最近ではテレビ番組や旅の情報誌で天空の城として竹田城が取り上げられ、多くの観光客で賑わっていることはたいへん嬉しく思います。ただ書かせていただいたように、急激に多くの方が来られたために石垣が崩落の危険性が出て天守台の石垣が立ち入り禁止となってしまう残念なことではあります。しかしその石垣を後世に残していくということは私たちの責任ではないのでしょうか。また竹田城が素晴らしい城跡であることは間違いありませんが、竹田城に勝るとも劣らない城跡はたくさんあります。このブームというのが、竹田城だけで終わることなく、大洲城天守の復元を一つの事例として、多くの城跡が、おらが街の宝として永く愛されていくことを望んでいます。

最後に城を訪ねるということは旅となります。そしてその後の楽しみは、温泉で体の疲れをとり、冷えたビールとその土地の料理で心と体のエネルギーを補充することです。そんな意味で私は「城を訪ねる」は旅の楽しさを兼ね備えた頭の体操として、これからも続けていきたいと思っています。

感想、叱咤激励、ここが間違っていたぞ！とのお叱り、何でも結構ですので下記までEメールでもいただければ有り難く思います。またお会いできる日を楽しみにしています。

〒570-8540 大阪府守口市外島町5-55

パナソニック健康保険組合 松下記念病院

中央臨床検査部 中島 康仁

E-mail : fwhz2544@mb.infoweb.ne.jp

文 献

- 1) ウィキペディア 天守
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E5%AE%88>
- 2) ウィキペディア 現存天守
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E5%AD%98%E5%A4%A9%E5%AE%88>
- 3) ウィキペディア 松江城
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%B1%9F%E5%9F%8E>
- 4) ウィキペディア 松本城
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%9C%AC%E5%9F%8E>
- 5) 高梁市ホームページ
<http://www.city.takahashi.okayama.jp/soshiki/9/shiro4240131.html>
- 6) 『朝日新聞』 2013年6月26日朝刊
- 7) ウィキペディア 人柱
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%BA%E6%9F%B1>

参 考 図 書

三浦正幸監修(2008) 『意外と知らない!こんなにすごい「日本の城」』 実業之日本社

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思ひます。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちいたしてあります。

